

2023年1月8日（日）／説教者：國分美生

説教：「光あれ」

聖書：マタイによる福音書7章7～12節

「初めに、神は天地を創造された」…神は無から有をつくられた、という言い回しはしばしば使われます。しかし2節には「地は混沌であって」とあります。つまりカオス状態（無秩序で、ごちゃごちゃした状況）がすでにそこにありました。その混沌に向かって神は言われました。「光あれ」。こうして光があり、それが神の天地創造の第一日目として描かれています。創世記の1章全体を通して神は、光、空、水、植物、生き物に存在を与え、整理し、この世界をつくっていきます。神はこの混沌の状態の中に秩序を与える方、神が「よし」とされて造られたこの世界は、本来は神の目から見てこのように整理整頓され正常であるのだ、とイスラエルの人々は心に刻みながらこの箇所を読んだことでしょう。とりわけ、神が最初に存在させたのが「光」であったことは、私たちの心に深くこだまします。

今私たちは、自分たちの住むこの世界がいかにか暗闇で、混沌としていて、絶望に満ちているか、目の前に突きつけられています。命が、なんと大切にされない時代であろうかと、失望して、悲しみ怒りに震えます。それだから、神が威厳と愛をもってこの混沌たる世界に光を生み出したことを宣言する、証しするこの聖書の言葉が、慰め、励ましです。

辺野古・大浦の海では新基地建設のため、美しい海が埋め立てられ、貴重な生き物たちが生き埋めにされています。陸地以上に多様で、たくさんの命が生きている海。とりわけ戦後を生きてこられた方の言葉が心に残ります。戦後沖縄は焼け野原になって何も食べるものがなくなった、だから海で取れるものを食べて命をつないだ、と。そういう意味で「海は命の母」という言葉も沖縄では人々の体験からくる実感のこもった言葉です。海が死ねば人間も生きてはいけません。

その海の上に雲の隙間から日の光が差し込んで、放射状に降り注いでいるのが見えました。「天使の梯子」です。厚い雲の切れ間から太陽の光がこぼれて希望の光が差し込んで見えるようなあの現象。「光あれ」という神の言葉が思い起こされます。「光あれ」。それは本当にこのように暗くどんよりした混沌のなかに、この天使の梯子のごとく出現した光であり、神の言葉であったのでしょうか。私たちはどんなに難しく、遠く思っても必ず神のつくられた正しい、正常な世界が来ることを信じます。この世界には神の「光あれ」の一言がすでに降り注いでいるからです。（國分美生）